

日本動物考古学会 第9回大会 プログラム・抄録集



ニホンオオカミの頭骨（江戸時代、三河地方、豊橋市自然史博物館所蔵）
大会会期中メイン会場内で展示

日時：2022年6月25日（土）・26日（日）

場所：豊橋市自然史博物館

主催：日本動物考古学会

共催：豊橋市教育委員会

目 次

大会組織委員会名簿	1
大会スケジュール	1
会場のご案内	2
会場案内図	3
発表者の方へ	4
研究発表プログラム	5-7
抄録	
口頭発表抄録	
研究発表A	9-13
研究発表B	14-18
研究発表C	19-22
研究発表D	23-26
ポスター発表抄録	27-37
普及講演会抄録	38-40
『動物考古学』原稿募集のお知らせ	41

大会組織委員会

会長

佐藤孝雄（慶應義塾大学）

大会事務局

安井謙介（豊橋市自然史博物館）

青野友哉（東北芸術工科大学）

石丸恵利子（広島大学総合博物館）

植月 学（帝京大学文化財研究所）

江田真毅（北海道大学）

小島秀彰（若狭町歴史文化課）

澤浦亮平（沖縄県立博物館・美術館）

本郷一美（総合研究大学院大学）

山崎 健（奈良文化財研究所）

山根洋子（港区立郷土歴史館）

大会スケジュール

6月25日（土）

12:00～ 会場・受付
13:00～13:10 開会の辞
13:10～14:50 研究発表A
14:50～15:00 休憩
15:00～15:30 ポスター発表①
15:30～17:10 研究発表B
17:10～17:20 休憩
17:20～17:50 総会

6月26日（日）

9:00～ 開場
9:20～10:40 研究発表C
10:40～10:50 休憩
10:50～11:20 ポスター発表②
11:20～12:40 研究発表D
12:40～12:50 閉会の辞
13:30～15:00 普及講演会
15:30～16:30 バックヤードツアー

6月27日（月）

9:00～15:00 エクスカーション

※バックヤードツアーとエクスカーションは事前申込者のみ

会場のご案内

豊橋市自然史博物館（愛知県豊橋市大岩町字大穴1-238 豊橋総合動植物公園内）

<https://www.toyohaku.gr.jp/sizensi/>

※公園へ入園の際には、事前参加登録者へお送りする「入園許可証」をご提示ください。大会参加は当日も受け付けませんが「入園許可証」のない方は入園料（600円）が必要になります。開園・開館時間は午前9時です。

交通アクセス

● 電車

JR豊橋駅から東海道本線浜松方面行きの電車で『JR二川駅』で下車
JR二川駅南口から総合動植物公園東門まで徒歩約6分

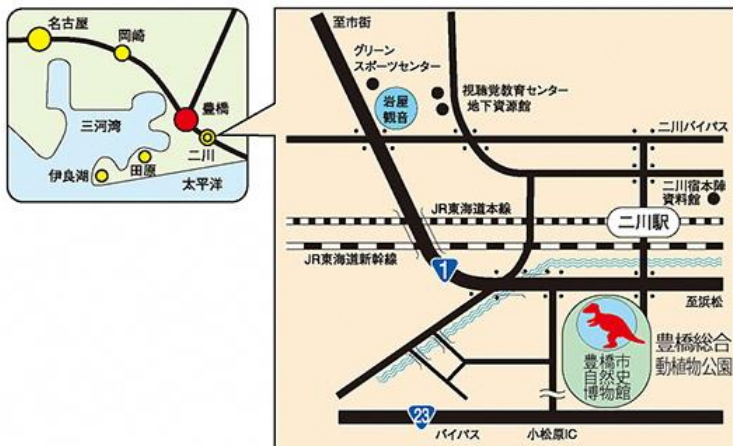
● 車（静岡方面から）

浜松ICから国道1号線(浜名バイパス経由)を豊橋方面へ約1時間
『動植物園入口』の信号を左折

● 車（名古屋方面から）

- ・豊川ICから国道151号線を小坂井方面へ約10分
『宮下』の信号を左折後、国道1号線を静岡方面へ約30分
『動植物園入口』の信号を右折
- ・音羽蒲郡ICから国道1号線を静岡方面へ約50分
『動植物園入口』の信号を右折

※駐車場を御利用の場合、普通車200円、中型・大型車400円が必要です。混雑が予想されますので、出来る限り公共交通機関を御利用下さい。駐車場は17時で閉門します。17時以降に出られる方は、必ず中央第一駐車場をご利用いただき、職員の指示に従ってください。なお、夜間は駐車場をご利用いただくことはできませんので、ご注意ください。

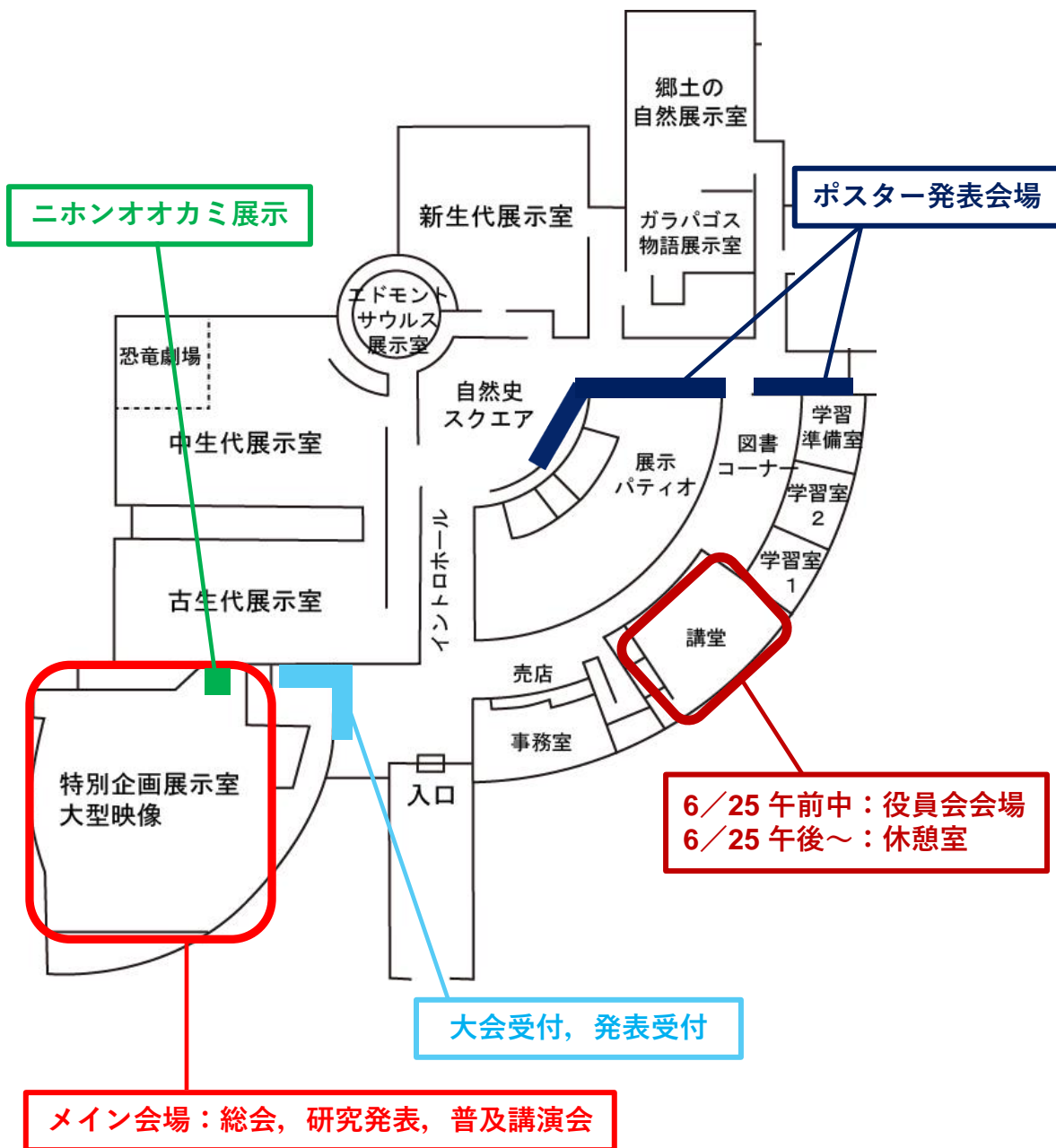


のんほいパーク（豊橋総合動植物公園）

<https://www.toyohaku.gr.jp/sizensi/>



会場案内図



発表者の方へ

本大会は非会員の方の参加も多く見込まれますので、できる限り平易な表現でのご発表をお願い致します。質疑は非会員からも受け付けます。

1. 口頭発表

・ 発表データの受け渡しと使用機材

発表者は、PowerPointのデータをUSBメモリに保存してお持ちください。発表には会場に設置されたPCをご使用ください。自前のPCを使用することはお控えくださいようお願いいたします。データの受け渡しは6月25日（土）12：00から受付で行います。ご自身の発表セッションの前の休憩時間までに発表データをご提出ください。PCは受付（データコピー専用）と会場（発表用）に1台ずつ用意いたします。

Microsoft PowerPoint 2013がインストールされたWindowsのPCを使用する予定です。Macで発表データを作成される方は、事前に各自で発表データがMicrosoft PowerPoint 2013で作動するか動作確認を行ってください。

・ 発表時間

1件当たり20分です。内訳は発表時間15分、質疑応答5分とお考えください。13分経過（ベル1回）、15分経過（ベル2回）、20分経過（ベル3回）をお知らせします。大会を円滑に運営できるよう、時間の厳守にご協力をお願いいたします。

2. ポスター発表

ポスターは、横90cm、縦180cm以内で作成してください。会場には掲示用の画鋏等を用意しますので、ご自身の演題番号が記されているボードに掲示をお願いします。ポスター掲示は6月25日（土）12:00から可能です。また、6月26日（日）15:30までに各自で撤収してください。

密集・密接を避けるために、1日目と2日目の両日にポスター発表の時間を設けています。発表者は、少なくともどちらか1日の発表時間にポスター設置場所でご発表下さい。

なお、会場は一般の来館者もポスターを見ることのできるスペースとなっております。

研究発表プログラム

6月25日（土）

開場・受付 12:00～

開会の辞 13:00（会長：佐藤孝雄）

研究発表A（座長：名島弥生）

13:10～13:30 **A1**「沖縄県久米島町下地原洞穴遺跡の再調査」

澤浦亮平・藤田祐樹・山崎真治・砂川暁洸

13:30～13:50 **A2**「群馬県居家以岩陰遺跡における縄文早期押型文期・条痕文期の動物遺存体および骨角貝製品（2017・18年資料をもとに）」

山崎京美・黒住耐二・江田真毅・谷口康浩

13:50～14:10 **A3**「鳥浜貝塚の空間形成と変遷」

佐藤巧庸・小島秀彰・鯨本眞由美

14:10～14:30 **A4**「土器残存脂質分析による真脇遺跡出土土器煮炊き内容物の評価と脂質情報の持つ意味—小竹、鳥浜遺跡との相互比較を通して—」

宮田佳樹・村本周三・遠部 慎・福井淳一・宮内信雄・

堀内晶子・三谷曜子・松石 隆・高田秀樹

14:30～14:50 **A5**「骨角器の孔からみえてきた縄文時代後晩期のX（工）字形製品の用途」

阿部きよ子

—10分休憩—

15:00～15:30 **ポスター発表①**（発表者・題目はp.7）

研究発表B（座長：小島秀彰）

15:30～15:50 **B1**「愛知県豊橋市石塚貝塚の再検討

—2019年度調査出土動物遺存体を中心に—」

納屋内高史・村上 昇

15:50～16:10 **B2**「石瀬貝塚の再検討—年代測定を中心に—」

遠部 慎・畑山智史・米田 穰・小林謙一

16:10～16:30 **B3**「愛知県保美貝塚の動物利用」

山崎 健

16:30～16:50 **B4**「土器施文・調整具としての貝工具について」

川添和暁

16:50～17:10 **B5**「愛知県豊川市の旧家で保管されてきたニホンオオカミの頭骨について」

安井謙介・石黒直隆・木谷良平・神戸 敦

—10分休憩—

17:20～17:50 **総会**

6月26日（日）

開場 9:00～

研究発表C（座長：澤浦亮平）

9:20～9:40 C1「土器圧痕でみられる貝類について（予察）」

黒住耐二

9:40～10:00 C2「貝殻硬組織の熱変性に関する基礎的研究」

畑山智史

10:00～10:20 C3「恵山文化の骨角器の紋様変遷について」

青野友哉

10:20～10:40 C4「高地性集落の動物資源利用と集団の性格に関する一考察」

石丸恵利子

—10分休憩—

10:50～11:20 ポスター発表②（発表者・題目はp.7）

研究発表D（座長：新美倫子）

11:20～11:40 D1「日本列島の古代・中世馬の四肢骨プロポーシヨンの多様性」

植月 学

11:40～12:00 D2「中世日本のニワトリの形態

—大分県中世大友府内町跡出土資料からの検討—」

江田真毅

12:00～12:20 D3「遺跡から出土する条鰭類椎体の分類群同定のための指標作成」

楠橋 直・岡本 隆

12:20～12:40 D4「千葉市動物公園における共同研究と成果の公開について」

西野雅人

閉会の辞 12:40（副会長：本郷一美）

普及講演会（大会イベント①）

13:30～15:00 「貝塚から探る昔の自然と人々の暮らし」

樋泉岳二

バックヤードツアー（大会イベント②）（事前申込制・人数制限あり）

15:30～16:30

ポスター発表

- P1 「下総台地における縄文時代後期の哺乳類利用」
坂本 匠
- P2 「新城下原第二遺跡出土のイノシシもブタなのか？」
新美倫子・玉城 綾
- P3 「石川県羽咋市吉崎・次場遺跡における弥生時代の狩猟活動」
吉永亜紀子
- P4 「三浦市間口洞窟遺跡の脊椎動物遺体」
佐藤孝雄・宇根宏紀・艾凱玲・千葉 毅
- P5 「出島オランダ商館のニワトリ」
許開軒・江田真毅
- P6 「農書からみる農耕馬と厩」
高尾将矢
- P7 「遺跡出土資料から見た北海道のマルタニシとオオタニシ」
松本建速・倉持拓司
- P8 「女性と出産―産屋の民俗誌事例と考古事例の比較―（続）」
高橋佳子
- P9 「鯨歯・髭工芸の現状と技術伝承の課題」
内田昌宏
- P10 「家畜イヌとオオカミの臼歯輪郭形状に対する幾何学的形態解析」
山田英佑・遠藤秀紀

口頭発表抄録

研究発表A

6月25日（土） 13:10～14:50

研究発表B

6月25日（土） 15:30～17:10

研究発表C

6月26日（日） 9:20～10:40

研究発表D

6月26日（日） 11:20～12:40

研究発表A1

6月25日（土）

13:10～13:30

沖縄県久米島町下地原洞穴遺跡の再調査

New excavation and reconsidering of Shimojibaru cave, Kume Island, Okinawa, Japan

○澤浦亮平（沖縄県立博物館・美術館）・藤田祐樹（国立科学博物館）・
山崎真治（沖縄県立博物館・美術館）・砂川暁光（久米島博物館）

Ryohei SAWAURA, Masaki FUJITA, Shinji YAMASAKI, Akihiro SUNAGAWA

沖縄県久米島町下地原洞穴遺跡はシカ類化石の多出と更新世乳児の骨格の出土で著名であるが、80年代の調査によって発掘された資料の再検討を進めるなかで、ミミガイ科（ミミガイやイボアナゴ）の多出を確認し、更新世人類の海産資源利用解明にとって再検討すべき重要な資料となる可能性が浮上した。既発掘資料は出土状況や出土層準が不明であるため、どの資料がどのように産出するのかを確認すべく予備的な現地調査を進めることにした。シカ類と共伴するミミガイ科を現地で新たに採取し放射性炭素年代測定を行ったところ、26856-26226 cal BC(PLD-42191、 2σ)という結果が得られ、更新世人類による利用の可能性が高まった。これを受け、さらに現地での試掘調査を進め、シカ類化石の密集する堆積およびシカ類化石とミミガイ科が共伴する堆積を層位的に確認した。本発表では、未公表であった過去の発掘調査の記録を紹介しながら、下地原洞穴遺跡の再検討と再調査の詳細について報告する。

群馬県居家以岩陰遺跡における縄文早期押型文期・条痕文期の動物遺存体および骨角貝製品（2017・18年資料をもとに）

Animal remains and bone-horn shell products from the Iyai rock shelter site, Gunma prefecture, dated in the Initial Jomon period of Oshigatamon and Joukonmon phases -based on 2017/18 data

○山崎京美（國學院大學）・黒住耐二（千葉県立中央博物館）・
江田真毅（北海道大学総合博物館）・谷口康浩（國學院大學）

Kyomi YAMAZAKI, Taiji KUROZUMI, Masaki EDA, Yasuhiro TANIGUCHI

本報告では、群馬県居家以岩陰遺跡の発掘調査で出土した、縄文時代早期押型文期・条痕文期の動物遺存体および骨角貝製品について報告する。2017・18年資料は3度目の報告となるが、微小遺存体を含めた動物遺存体を可能な限り同定した結果、新たにメダカラ？、微小貝類10種、マイマイ類2種、サワガニ？、ハタネズミ、アカネズミ属、カワネズミ、アズマモグラ、ヒミズ族、キツネ、イタチが得られた。遺跡近くに小河川はあるが、本遺跡の出土動物相は淡水性資源よりは在地性陸生動物資源で構成されていることが判明した。陸産微小貝類からみた景観復元では、押型文期の前庭部緩斜面は条痕文期の岩陰部よりも開けていた可能性があり、長野県湯倉洞窟遺跡との違いや千葉県取掛西貝塚との類似点が示唆される。サワガニ？やカエル類、小型哺乳類の一部には被熱痕があることから、食資源として利用された可能性も検討する必要がでてきた。骨角貝製品のうち貝製品の多くは岩陰部での出土であり、条痕文期の埋葬人骨に関連する。メダカラ？の確認により貝製品はセットとして搬入され、化石ヤスリツノガイは産地である神奈川県三浦半島や、貝製品の素材と形態は早期前葉撚糸文期の取掛西貝塚と共通する。本遺跡の骨角貝製品は栃原岩陰遺跡や湯倉洞窟遺跡との類似点もあるが相違点もみえてきた。同時期の遺跡との比較検討も含めて、押型文期と条痕文期における動物資源利用の違いを報告する。

研究発表A3
6月25日（土）
13:50～14:10

鳥浜貝塚の空間形成と変遷

The site formation and transition of Torihama shell midden

○佐藤巧庸（滋賀県文化財保護協会）・小島秀彰（若狭町歴史文化課）・
鯨本眞友美（福井県立若狭歴史博物館）

Koyo SATO, Hideaki KOJIMA, Mayumi AJIMOTO

福井県若狭町に位置する鳥浜貝塚では、縄文時代草創期から前期末にかけて、約7800年間に及ぶ、人間活動の痕跡が確認されている。当遺跡は10次に渡る発掘調査を通じて、縄文人の生業活動の解明に向けた研究が今日まで先駆的に進められてきた。しかし、遺物や遺構を評価する上で不可欠な基礎的検討が、十分とは言い難い状況にある。そこで、発掘調査当初より掲げられてきた「生業を中心とする生活の復元」について再考することを目的とし、調査区内の堆積層と出土遺物に対する時空間的な検討を行った。

その結果、遺物を包含する砂礫層や有機物層、そして貝層が形成される範囲には時期的な変遷が見られることを確認した。その要因として、遺跡内における人間活動そのものが変化していた可能性が挙げられる。時系列に沿って説明すると、縄文時代草創期と早期には、汀線部に木杭等を打ち込むといった人間活動が認められる。時期が下り、前期になると貝層が形成され、人間の主要な活動場所は、椎山丘陵に沿って東から西へと変遷した。本発表では、将来的な鳥浜貝塚研究を視野に入れつつ、当遺跡における生業空間の形成と変遷について述べる。

土器残存脂質分析による 真脇遺跡出土土器煮炊き内容物の評価と脂質情報の持つ意味 －小竹、鳥浜遺跡との相互比較を通して－

Lipid analysis in pottery at Mawaki archaeological site;
in terms of comparison between Odake and Torihama sites

○宮田佳樹（東京大学）・村本周三（北海道教育庁）・
遠部 慎（上黒岩岩陰遺跡考古館）・福井淳一（北海道埋蔵文化財センター）・
宮内信雄（東京大学）・堀内晶子（国際基督教大学）・
三谷曜子（北海道大学）・松石 隆（北海道大学）・
高田秀樹（真脇遺跡縄文館）

Yoshiki MIYATA, Shuzo MURAMOTO, Shin ONBE, Junichi FUKUI, Nobuo MIYAUCHI,
Akiko HORIUCHI, Yoko MITANI, Takashi Matsuishi, Hideki TAKATA

石川県能登町にある真脇遺跡は、縄文時代前期末～晩期にかけて、約4000年間断続的に利用された北陸地方の代表的な遺跡である。前期末のイルカ層と言われる包含層では、多量のイルカ骨と土器片が共伴しており、当時集団でイルカ漁を行い、土器で調理した痕跡と考えられてきた。本研究の目的のひとつは、土器残存有機物の起源をこれまでの土器付着炭化物の安定同位体解析、放射性年代測定による海洋リザーバー効果の観点に加えて、脂質分析（① 脂質組成によるバイオマーカー分析、② 分子レベル炭素同位体分析）によって、イルカを含む海棲動物を土器で煮炊きしていたのかを評価することである。さらに、同時期の日本海側の小竹、鳥浜遺跡との相互比較を行うことで、土器残存脂質情報から地域性・同質性を検討する。

骨角器の孔から見えてきた 縄文時代後晩期のX（工）字形製品の用途

Uses of X-shaped products from the late to the final Jomon period
that can be seen from the holes in the bone tools

阿部きよ子

Kiyoko ABE

関東以北の縄文時代後晩期の遺物の一つに小形で扁平なX（工）字形の製品がある。未製品を含め、骨角製品3点、貝製品6点、土製品2点、石製品12点を確認した。稀少な遺物だが、礼文島の貝製品と千葉県印西市の牙製品、いわき市の骨角製品とさいたま市の石製品のように、似た形状で素材が異なるものが遠隔地から出土している。その現象の背景に、残存しにくい素材の実用品が広範囲に存在していたと考え、民具を探したところ、アイヌの携帯用糸巻と海外のカード織の用具があった。そこで、繊維関係の道具であったと仮定して、遺物の観察と模型による実験を行った。いわき市真石貝塚出土の骨角器は、5つある孔のうち中央の孔は両面から穿孔した痕跡が残るが、周辺の4つは、同一サイズで、パンチであけたかのような円筒状の孔であった。一方、模型に糸を通して手の中で回したり、振り回したりすると、一度に何本もの繊維が撚りあわさった丈夫な糸、紐を作成でき、糸巻としても便利に使用できた。真石貝塚出土品の4つの孔の形状は、中を通る繊維（糸）と孔の内面が回転によって擦れた結果と推定できる。さらに使用法の研究が必要だが、X（工）字形製品は、撚りかけ具・糸巻といった繊維関係の実用の道具であろう。X字形以外でも、装飾品、呪術具とされてきた遺物の中に繊維関係の道具が含まれている可能性があり、骨角器の場合は特に孔の観察が必要と思われる。

愛知県豊橋市石塚貝塚の再検討 -2019年度調査出土動物遺存体を中心に-

Re-examination of Ishizuka Shell Midden in Toyohashi City, Aichi Prefecture, Japan
-Focusing on faunal remains excavated in the 2019 survey-

○納屋内高史（富山市教育委員会 埋蔵文化財センター） ・
村上 昇（豊橋市教育委員会 美術博物館 文化財センター）

Takashi NAYAUCHI, Noboru MURAKAMI

愛知県豊橋市石塚貝塚は、久永春男らによる調査成果により、東三河地域における数少ない縄文時代前期の貝塚遺跡として著名である。2019年度に開発計画に伴う確認調査が行われ、貝塚の現状について情報を得た。本調査では、久永らが指摘した上下2層の貝層の堆積は明確に確認されなかったが、貝層分布範囲の外に縄文時代後期の堆積層が確認された。出土した動物遺存体については、貝類以外のものはイヌが2点、フジツボ類が26点出土しているのみで、ほぼ貝類のみで占められる。貝類はハマグリが62.5%、マガキが15.3%と続き、これ以外の種はごくわずかの出土にとどまる。本発表ではこの調査結果と過去の調査・研究結果や周辺の縄文時代貝塚における動物遺存体の分析結果を比較することを通じ、本貝塚の再検討を行う。

研究発表B2
6月25日（土）
15:50～16:10

石瀬貝塚の再検討-年代測定を中心に-

Reinvestigation of the Ishise Shell Midden-Radiocarbon Dating-

○遠部 慎（中央大学）・畑山智史（飛ノ台史跡公園博物館）・
米田 穰（東京大学）・小林謙一（中央大学）

Shin ONBE, Satoshi HATAKEYAMA, Minoru YONEDA, Kenichi KOBAYASHI

愛知県常滑市石瀬貝塚で1958年に発見された人骨は学史的に知られた資料であるが、東海地方でも研究事例の少ない縄文時代中期の人骨である。本研究では、石瀬貝塚の人骨を分析対象とし、基礎的な同定作業、加速器を用いた年代測定、安定同位体測定を行ったので、その結果を報告する。あわせて、現在動物遺存体の分析も進めており、それらの成果についても速報的に紹介する。

愛知県保美貝塚の動物利用

Animal utilization at the Hobi shell mound, Aichi prefecture

山崎 健（奈良文化財研究所）

Takeshi YAMAZAKI

愛知県田原市の保美貝塚は、渥美半島先端の福江湾西岸奥に位置する。A・B・Cの3ヵ所の貝塚が環状に巡り、縄文時代晩期前葉にB貝塚やC貝塚、晩期中葉になるとA貝塚で貝層が形成され、晩期後葉にピークを迎える。2009・2013・2014年の発掘調査において、晩期前葉～後葉の動物遺存体が出土しており、哺乳類はイノシシ、ニホンジカ、タヌキ、魚類はフグ科、マダイ亜科、クロダイ属、ニシン科などが多い。また、過去の発掘調査ではニホンアシカが数多く出土していることが知られている。

保美貝塚と伊川津貝塚は、福江湾を挟んで西岸奥に保美貝塚、東岸に伊川津貝塚が約5 km離れて併存する。両貝塚の貝層形成には時期差が認められ、保美貝塚は晩期後葉以降に貝層形成が活発化するのに対し、伊川津貝塚は晩期前葉に大規模な貝層が形成され、晩期後葉になると採貝活動（貝層形成）は継続するものの、貝層中に動物骨が含まれなくなる。

渥美半島の貝塚群は数多くの人骨が出土したことで知られており、出土人骨の年代測定、同位体分析、DNA分析が活発に実施されている。将来的に、そうした分析結果と議論を深められるように動物遺存体の所見を整理しておきたい。

研究発表B4
6月25日（土）
16:30～16:50

土器施文・調整具としての貝工具について

Shell tools for patterning and surfacing Jomon and Yayoi pottery

川添和暁（愛知県埋蔵文化財センター）

kazuaki KAWAZOE

縄文時代・弥生時代において、日本列島の各地で土器製作においてさまざまな貝工具の使用の実態が、これまでも多くの諸先学の研究ですでに指摘されている。演者は、上記の研究を踏まえた上で、東海地域の縄文土器を中心に、貝工具と使用されていた貝種やその状態についての推定を、これまで継続して実施してきた。推定は、貝工具の種類・状態のほか、土器器面の湿度・角度・工具の動作方向など、さまざまな条件設定をした実験結果をもとに、実資料との対比を行う方法により実施している。その結果、現在、縄文時代後期から晩期に至っては、巻貝工具から二枚貝工具へのより詳細な時期的変遷について把握する状況に至っている。この研究の目指すところは、土器型式研究への還元を基にした、共通した情報を有する広域集団の把握である。本発表では、文様と器面調整痕とは製作工程上別とする姿勢に基づいた上で、これまでの調査成果をまとめるとともに、今後の研究展開についても言及していきたい。

愛知県豊川市の旧家で保管されてきた ニホンオオカミの頭骨について

A skull of Japanese Wolf preserved at old private house in Toyokawa city, Aichi Prefecture

○安井謙介（豊橋市自然史博物館）・石黒直隆（総合研究大学院大学）・
木谷良平（豊橋総合動植物公園）・神戸 敦（三河生物同好会）

Kensuke YASUI, Naotaka ISHIGURO, Ryohei KITANI, Atsushi KANBE

愛知県豊川市の旧家で保管されてきたニホンオオカミと伝わる頭骨が、2021年に豊橋市自然史博物館へ寄贈された。寄贈者によると、1950年頃まで病気治癒の祈願に使用されており、寄贈者宅での使用のみならず近隣住民へも貸与していたとのことである。

この頭骨の由来は不明であるが、頭骨が納められていた木箱の蓋に「明治29年」との記載があることから、それ以前に捕獲された個体由来のものと推定される。また同時に寄贈された関連資料から、斉藤（1938）でニホンオオカミの頭骨の一つとされた「所蔵者：鈴木辰治氏（愛知県）、採集地：三河産、採集年代：徳川時代」の頭骨と今回寄贈された頭骨が同一のものであることが判明した。ちなみに、愛知県内で確認されているニホンオオカミとされる頭骨は本頭骨を含め4点報告されているが（阿部 1937：斉藤 1938）、現在所在が明確なのは本頭骨のみである。

今回、本頭骨の形態的特徴を再検討するとともに、腹鼻甲介から抽出したmtDNAの塩基配列を用いて遺伝学的解析を実施したところ、本頭骨がニホンオオカミであることに間違いがないことが明らかとなったので、ここに報告する。

阿部余四男 1937 神谷氏所蔵の山犬（日本狼）頭骨に就いて 博物館研究 10（3）：5-7

斉藤 弘 1938 東京科学博物館倉庫内に発見せられたるヤマイヌの全身骨格並に他の同資料に就いて 博物館研究 11（4）：2-7

土器圧痕でみられる貝類について（予察）

Shells detected in impressions on pottery (Preliminary study)

黒住耐二（千葉県立中央博物館）

Taiji KUROZUMI

土器圧痕で確認される貝類は、ア：意図的なものと、イ：非意図的なものに大別できると思われる。

意図的なものとして、1) “混ぜ込み”、2) “スタンプ”、3) 土器の施文具、4) 土器の混和剤の4 類型を想定している。1) “混ぜ込み”には、沖縄の近世期の焼き物中に、殻サイズ1 cm程度の淡水産巻貝・ヌノメカワニナが特徴的に見られる例がある。確認頻度が高く、サイズが大きく、粘土中に含まれていた訳ではなく、意図的に入れたと考えている。このカワニナは水田で高密度に生息しているが、水田に生息し食用として珍重されるマルタニシの圧痕は確認できていない。2) “スタンプ”も同様に、1 cm以上の巻貝（ウミニナ類）やシジミ類で、サイズが大き過ぎるためは、混入とは考えにくい。3) 施文具例は、従来から認識されているが、微小巻貝を利用している例も見られた。4) 混和剤は、海岸の砂粒としての磨滅した貝殻を検出する例である。演者は、スタンプ等は広く認められず、サイズが大ききことから、“文化集団を認識できるもの”ではないかと考えている。

イの非意図的な例は、微小な陸産貝類や薄質の海産貝類であり、土器製作の場周辺に生息、隣接地から風で運ばれる、何らかの物に付いてきたものと想定される。微小貝類の同定から、a) 土器製作の場の推定（屋外vs屋内）、b) 場周辺の微細な環境復元（草地／海岸林等）、c) 認識できていない搬入物の推定等が行えると考えている。

貝殻硬組織の熱変性に関する基礎的研究

Basic study of thermal denaturation of mollusk Shell structure using *Corbicula japonica*

畑山智史（船橋市飛ノ台史跡公園博物館／中央大学人文科学研究所）

Satoshi HATAKEYAMA

貝殻の硬組織は、刻まれた成長線や含有する酸素同位体を分析することで、季節という高解像度な時間軸を与え、さらにその際の海水温度を復元できる有用な試料である。しかしながら、この硬組織について、熱変性による分析の障害が明らかになりつつある。煮炊きなどによる貝殻硬組織の影響は、1980年代において、伊皿子貝塚の分析で知られ、近年では酸素同位体にも影響があることが指摘されている。そこで本研究では、煮炊きなどによる加熱によって、貝殻硬組織に刻まれる成長線の変化を把握するため、現生のヤマトシジミを資料とした加熱実験をおこなった。

その結果、貝殻表面の変化は、300°Cで45分間よりみられ、殻体は白色から灰褐色に変化している。貝殻切断面の微細構造である成長線の消失は、約300°C・45分間の燃焼後に外気と接する腹縁より開始していた。所々でその成長線の計数が可能であった。成長線の消失した部分は、本来、観察できる成長線の方角に対して、垂直方向に歪なラインがみられた。

研究発表C3
6月26日（日）
10:00～10:20

恵山文化の骨角器の文様変遷について

Temporal changes in the pattern of bone tools in Esan culture

青野友哉（東北芸術工科大学）

Tomoya AONO

北海道の続縄文文化期の骨角器は、縄文時代と比較して、種類と装飾的要素が増加する点に特徴がある。特に道南西部の恵山文化には、クマやクジラを彫刻した儀式用の匙が存在するほか、実用品である銚先や指掛け部にも線刻が施される。これまで銚先の形態や機能面からの分類と編年研究は行われてきたが、実用利器における文様の機能・用途への言及や祭祀道具における文様の変遷と伝世期間に関する研究は進んでいない。本発表では北海道南西部の伊達市有珠モシリ遺跡ほか3遺跡の骨角器を対象とし、文様の分類と変遷の原理を示す。具体的には「I（工）」・「T」・「テ」字文及び列点文は縄文晩期の土器・土製品に施される玉抱三叉文からの派生として理解できる。これにより、線刻は個人や祖先集団を示す「印」ではなく、意味を付与しつつ形骸化する「模様」といえる。なお、本研究は骨角器の伝世期間や、漁労民の地域間関係を議論するための基礎論である。

高地性集落の動物資源利用と集団の性格に関する一考察

A study on the use of animal resources and the group characters
in high-altitude settlements of the Yayoi period

石丸恵利子（広島大学総合博物館）

Eriko ISHIMARU

いわゆる「高地性集落」は、その立地から低地性遺跡と対になる存在として認識されたことに始まり、当時の年代観や石鏃などの出土遺物から防御機能を持った軍事的施設として、また新年代観の提示により小地域内での分析も進み、交易や流通などの経済的機能を持つものだとも理解され、多様化しながら研究が進展している。動物遺存体の分析から高地性集落の性格を論じたものとしては、形成される貝塚には貝類のみで構成されるものと同時に魚骨や獣骨を含むものが認められ、両者の違いを漁撈活動のウェイトの置き方や自然的・文化的背景にあると指摘したもの（金子1979）や、貝の種類や採取時期などから梅雨期の水害回避のための季節的集落の可能性を指摘したもの（池田1999）などがある。

本発表では、これまでに実見した紫雲出山遺跡（香川県三豊市）や雲透遺跡（佐賀県唐津市）などの出土動物遺存体や骨角貝製品の出土状況などから、高地性集落における動物資源利用の特徴や集団の性格に関する一考察について報告する。

池田 研 1999 「高地性集落の機能と生業－出土貝を中心として－」 『国家形成期の考古学－大阪大学考古学研究室10周年記念論集－』 pp.149-166

金子浩昌 1979 「動物遺体からみた弥生系高地性集落」 『高地性集落跡の研究』 資料篇 pp.971-972

日本列島の古代・中世馬の四肢骨プロポーシヨンの多様性

Diversity of limb bone proportions of classical and medieval horses in the Japanese archipelago

植月 学（帝京大学文化財研究所）

Manabu UETSUKI

古代・中世遺跡出土馬の四肢骨プロポーシヨンは在来馬とは異なっており、かつ3タイプに大別できた。タイプ1は千葉県須和田遺跡（古代）の1個体を典型とし、小型で末端の骨ほど長い。全身ではなく部位限定だが、鎌倉市由比ガ浜中世集団墓地遺跡（中世。以下、由比ガ浜）の小型個体群もパターンは一致した。同じ由比ガ浜でも大型の1個体は橈骨が長い点が異なり、タイプ2とした。部位限定の他の大型個体や鶴澤・本郷（2006）報告の由比ヶ浜南遺跡の大型個体も同じパターンに分類された。タイプ3の山梨県武田氏館跡の1個体（中世）は中手・中足骨が短い点で区別された。個体ではなく集団の平均だが、青森県大光寺新城跡（中世）も類似パターンを示した。両遺跡とも小型で、在来馬とのプロポーシヨンの差はもっとも小さかった。

以上3タイプのうち、末端の骨が相対的に長いタイプ1、2は鶴澤・本郷（2006）が指摘したように走行適応した一群と推測される。逆の特徴を持つタイプ3は走行に不向きで、在来馬とのプロポーシヨンの類似性や小型である点から山間地適応や駄馬的用途が想定される。由比ガ浜の小型と大型個体群でプロポーシヨンの差が生じた原因は明らかでない。しかし、従来の推定体高による検討では連続的変異とみなされていたサイズが明確に2群に分かれ、プロポーシヨンの違いとも対応したことから、両者が系統的に異なっていた可能性も検討の余地がある。

中世日本のニワトリの形態 —大分県中世大友府内町跡出土資料からの検討—

Morphological characteristics of domestic chickens in Medieval Japan, based on chicken remains from the Otomo-Funai site, Oita

江田真毅（北海道大学）

Masaki EDA

ニワトリは日本には弥生時代中期に渡来したとされる。一方、近世までの遺跡からの出土量は少なく、その後の時代に飼育されたニワトリの形態変化の実態はよくわかっていない。大分県大分市の中世大友府内町跡では16世紀後半に比定されるニワトリの骨が多数出土している。その分析から、当時のニワトリの形態についての知見が得られると考えられた。そこで本研究では、同遺跡から出土したニワトリの骨を計測し、現代のセキショクヤケイや様々な品種のニワトリと統計学的手法を用いて比較した。その結果、大友府内町で利用されたニワトリは、動物園などで飼育されていたセキショクヤケイに比べて大きく、プロポーションも異なることが分かった。また、距突起の有無で性を推定して比較した結果、大友府内町で利用されたニワトリの足根中足骨にはサイズとプロポーションに性差があり、メスのほうがサイズは小さい一方、太い形状をしていることが分かった。さらに、雌雄ともに2つの品種あるいはそれに類するサイズグループに由来する個体が含まれることが確認された。雌雄で推定された2つのサイズグループは、いずれも中世末に日本にいたとされる現在の地鶏や小国よりかなり大きかった。このことは、かつての地鶏や小国が現在より大型であった可能性や、文献史料から考えられてきた以上に外来鶏が普及しており日本鶏と交雑していた可能性から説明できると考えられた。

遺跡から出土する条鰭類椎体の分類群同定のための指標作成

An exploration of an index for more efficient identification of fish vertebrae excavated from archaeological sites

○楠橋 直・岡本 隆（愛媛大学理学部）

Nao KUSUHASHI, Takashi OKAMOTO

魚類の椎骨は貝塚など多くの考古遺跡から出土するが、棘や突起が欠損した椎体だけが単体で出土することが多く、分類群同定の難しい部位でもある。そのため、特に初学者の場合、同定のため手当たり次第に膨大な種数の骨格標本との比較を行わざるを得ない。同定に骨格標本との比較が必須であることは当然であるが、比較対象種に優先順位をつけられれば、分類群同定が少しはやりやすくなるだろう。そこで我々は、条鰭類魚類の椎体形態に関するそのような指標の作成を目指している。今回検討したのは、椎体の背腹高に対する相対的な長さ L/H である。現生条鰭類69+種262個体の椎体を計測したところ、 L/H のとり得る値は種間で重複するものの、最大値・最小値や四分位数は種によってやや異なることがわかった。したがって、同定したい試料の L/H がそれぞれの魚種の L/H 値分布の中央値からどれほど離れているかを調べれば、比較対象種に優先順位をつける一つの指標となり得ると考えられる。このような指標を組み合わせて、ある程度信頼できる優先順位を得る方法を構築できれば、椎骨同定をより効率化することができるのではないだろうか。

千葉市動物公園における共同研究と成果の公表について

Creation and publication of results through joint research, at Chiba Zoological Park

西野雅人（千葉市埋蔵文化財調査センター）

Masato NISHINO

千葉市動物公園の敷地は、餅ヶ崎遺跡という縄文時代中期後葉から後期初頭を代表する集落遺跡であり、出土品を現地公開するとともに、動物に因んで「野生動物とヒトの関わりの歴史」というテーマ展示を行っている。千葉県では貝塚出土動物遺体のデータの蓄積が進んでいるが、狩猟活動や陸上動物資源の利用の実態解明は遅れている現状にある。一方、野生動物による被害は年々増加しており、動物との関わり方は大きな社会問題となっている。千葉市動物公園は「アカデミア・アニマリウム」と題して、動物をめぐる学術的な活動と公表の場を設けており、狩猟対象動物の研究や現行狩猟の記録などの共同研究を進め、将来は加曽利新博物館の研究事業に引き継ぐ予定である。動物考古学研究者や学生の皆さんに研究と成果公表、他分野との連携等の場として利用していただきたいと考え、紹介の機会をいただいた。

ポスター発表抄録

ポスター発表①

6月25日（土） 15:00～15:30

ポスター発表②

6月26日（日） 10:50～11:20

下総台地における縄文時代後期の哺乳類利用

Utilization of mammalian resources in the Late Jomon period on Shimousa Plateau

坂本 匠（京都大学大学院）

Takumi SAKAMOTO

関東地方の東京湾沿岸域では、縄文時代に多くの貝塚が形成されたことが知られている。その中でも縄文時代後期の貝塚は、生業活動の復元などを目的として多方面から研究が進められ、動物利用についても議論が盛んに行われてきた。一方、後期前葉の検討事例が数多く蓄積されていく反面、後期中葉以降の様相は不明な点も多く残っており、未だ検討の余地が残されていると考えられる。

本発表では、千葉県下の下総台地に着目して、後期中葉以降の哺乳類利用、特に今回は主にニホンジカの利用について検討した。具体的には、海浜部の園生貝塚と内陸部の内野第1遺跡の未報告資料の再整理を行い、両遺跡における出土部位の様相や遺跡間の関連性を検討した。その結果、各遺跡は出土する骨部位に偏りが見られる点で共通することが分かった。一方、園生貝塚では四肢骨の、内野第1遺跡では角や上顎・下顎骨の出土が顕著な点で両者は異なる傾向を示した。両者の違いは相互補完的であり、内陸部から海浜部へと哺乳類資源が運ばれた可能性がある。また、当地域では後期中葉以降に、貝類などの海産資源が海浜部から内陸部へ向けて運ばれる様子が明らかになりつつある。今回の結果から、当時期の動物利用は地域間の関連性の中で変質していくことが示唆される。

あらぐすくしちやばる

新城下原第二遺跡出土のイノシシもブタなのか？

Domesticated pigs ? or Wild boars ?

Are *Sus scrofa* remains excavated from Aragusuku Shichabaru No. 2 site, Okinawa

○新美倫子（名古屋大学博物館）・玉城 綾（沖縄県埋蔵文化財センター）

Michiko NIIMI, Aya TAMASHIRO

沖縄ではイノシシが多数出土した縄文時代の遺跡がいくつも知られているが、その中で最も著名なのは嘉手納町の野国貝塚B地点であろう。野国貝塚では661個体のイノシシが出土したとされ、これらは形態分析の結果からその大部分が野生イノシシではなく中国大陸から持ち込まれた家畜ブタ、あるいはその子孫であり、遺跡の人々による何らかの保護・管理の下にあったと考えられる。では、このブタの持ち込みと飼育は野国貝塚に限定された特殊なできごとだったのだろうか、それとも沖縄の他の遺跡や地域にも見られる、また長期にわたって継続する現象なのであるか。もし、これが広く行われていたのであれば、周囲の他遺跡の出土資料にもその結果が現れるはずである。

ところで、野国貝塚と同じ沖縄本島西海岸には、やはり縄文時代のイノシシ類が多数出土した新城下原(あらぐすくしちやばる)第二遺跡がある。当遺跡は野国貝塚と10キロほどしか離れておらず、イノシシ類が利用された時期も比較的近い。そこで今回は新城下原第二遺跡出土イノシシ類について、これらもブタなのだろうか？また飼育されていたのだろうか？といった観点から検討してみたい。

よっさき すば
石川県吉崎・次場遺跡における弥生時代の狩猟活動

Hunting of the Yayoi period in the Yossaki-suba site, Ishikawa prefecture

吉永亜紀子（総合研究大学院大学）

Akiko YOSHINAGA

吉崎・次場遺跡は、石川県羽咋市に所在する弥生時代を中心とする集落遺跡である。1952年に邑知潟干拓事業に伴って発見されて以降、数度にわたり発掘調査が行われてきた。石川県埋蔵文化財センターを調査主体として発掘調査が実施されたJ区(1980年度)、W区(1984年度)から動物遺体が出土し、渡辺(1988)によりその一部である239点(NISP)が報告されていた。両調査区からは弥生時代前期～中期前葉の土器が確認されており(福島編1987)、年代測定分析結果(註)からも動物遺体は弥生時代の所産と考えられる。

再整理作業等を実施した結果、貝類、魚類、鳥類、哺乳類を含む計5,330点(NISP)を数える動物遺体の内容が明らかとなった。これまで縄文時代に比べ様相が不明であった北陸地方における弥生時代の動物相や狩猟活動、動物資源利用の一端を明らかにする資料であると評価される。貝類4,164点以外では、シカが866点と最も多く、次いでイノシシ147点、シカまたはイノシシと考えられる四肢骨破片139点であり、シカの出土が目立つ。シカは全身にわたる部位が出土している。鹿角は、前頭骨・角坐を伴う部位と叉状部で切断された先端部が多く角幹部を欠いており、出土部位に偏りが見られた。ほぼ全ての鹿角に、鉄器によるものと考えられる切断痕、加工痕が観察された。同調査区からは石鏃の出土も確認されており、食料利用だけでなく鹿角製品の素材獲得も目的の一つとして活発な狩猟活動が行われていたことが指摘される。

註：吉崎・次場遺跡出土遺物の年代測定分析結果については、公益財団法人石川県埋蔵文化財センターより御提供をいただいた。詳細は今後別稿にて報告予定である。

福島正実編 1987『吉崎・次場遺跡 県営ほ場整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書第1分冊(資料編(1))』石川県立埋蔵文化財センター

渡辺誠 1988「W調査区出土動物遺体」『吉崎・次場遺跡 県営ほ場整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書第2分冊(資料編(2))』石川県立埋蔵文化財センター

三浦市間口洞窟遺跡の脊椎動物遺体

Vertebrate remains excavated from the Makuchi cave
located by the southeastern tip of the Miura Peninsula

○佐藤孝雄（慶應義塾大学）・宇根宏紀（明治大学）・艾凱玲（慶應義塾大学）・
千葉 毅（神奈川県立歴史博物館）

Takao SATO, Hiroki UNE, Kailing AI, Tsuyoshi CHIBA

間口洞窟は剣崎に程近い三浦半島南東部に開口する海蝕洞窟である。1949・50年、赤星直忠率いる横須賀考古学会によって実施された発掘を嚆矢に、以後、神沢勇一、川口徳治郎ら神奈川県立博物館の関係者らにより調査が重ねられた当洞窟は、国内初例となる弥生時代中・後期のト骨、アワビ殻を用いた「貝包丁」、古墳時代後期のト甲が発見されたことでも名高い。本年度、『洞窟遺跡を掘る－海蝕洞窟の考古学－』と題する特別展を開催するに当り、神奈川県立歴史博物館で当洞窟の出土遺物の整理作業が進められるなか、発表者らは同館所蔵の間口洞窟出土資料のうち脊椎動物遺体の内容と骨角器の素材を同定・観察する機会を得た。本発表では件の資料のうち鳥獣遺体の内容を報告する。

出島オランダ商館のニワトリ

Chickens consumed in the Dejima Oranda Shokan site

○許開軒（北海道大学大学院文学院）・江田真毅（北海道大学総合博物館）

Kai-hsuan HSU, Masaki EDA

出島和蘭商館跡は17世紀半ばから19世紀後半に長崎県長崎市出島町に所在したオランダ商館の跡地である。出土した鳥類遺体ではニワトリの割合が多いことが知られている。しかし、種名のみが挙げられ未分析のままとなっている資料や詳細が報告されていない資料も多い。また、組織学的・形態学的観点からの分析の余地がある資料も多数あり、出島における鳥類利用やニワトリ利用パターンの全体像は十分把握されているとは言い難い。そこで、本発表では、年齢、解体・廃棄のパターンやニワトリの性別、体サイズなどの観点から出島和蘭商館跡から出土した鳥類遺体を分析し、長崎に滞在していたオランダ人によるニワトリの利用パターンを検討する。

出島オランダ商館では、ニワトリは17世紀から19世紀にかけて利用された鳥類の90%以上を占め、江戸時代を通じてもっとも頻繁に利用された鳥類であった。食用とされた個体には、幼鳥・若鳥と産卵期の雌鶏が多数含まれていた。一方で、17世紀とそれ以降では、幼鳥・若鳥は減少し、産卵期の雌鶏の割合は増加する時期差が認められた。また、ニワトリの骨のサイズは変異が大きく、複数の品種が存在した可能性が考えられた。骨格部位組成と解体痕の分析から、ニワトリは足の「もみじ」がついていない状態で搬入された場合があったこと、調理の過程で「胸肉」と「手羽」は切り離されたことが多かったことが推定された。

農書からみる農耕馬と厩

Agricultural horses and stables from agricultural books

高尾将矢（株式会社ノガミ）

Masaya TAKAO

本研究では厩に関する記載が確認できる農書、会津農書・厩作附飼方之次第・奥民図彙・厩馬新論・農業家訓・百姓伝記・糞養覚書を用い農耕馬と厩について分析を行った。馬は用途で農耕馬と騎乗馬の2種がある。そのうち農書に記載されているのは農耕馬であり、主に耕作・運搬・厩肥生産に利用された。特に厩肥生産は厩の構造に多大な影響を及ぼしている。

篠崎讓治（2015）は竪穴をもつ厩が東国に多く西国には確認できないことを指摘する。農書も同様に対馬を除くと、厩の記載がある農書は東国に偏る傾向がある。中西僚太郎（1994）は明治前期の耕牛と耕馬の地域性について分析を行い、岐阜より東は馬が多く西は牛が多く九州と四国は牛馬共に同程度存在したことを指摘している。また1713年（正徳3年）成立の和漢三才図絵には「大抵関東ニハ馬多ク牛少シ関西ニハ牛多ク馬少シ…… 農牛ハ田ヲ耕シ人カヲ助ク関東ニハ則馬ヲ以之ニ代フ」とあり、近世においてもこの傾向は同様であることが確認できる。こうしたことから竪穴をもつ厩が東国に多く分布するのは、牛耕文化と馬耕文化の差異を反映した結果であると考えられる。そこで西国の竪穴状遺構について検討した結果、都城市並木添遺跡のSA1・SA2・SB24は形状から厩であると判明した。東国の厩には見られない、硬化面もつことが特徴である。対馬で成立した糞養覚書には「底はよく踏み固めておく」とあり、硬化面をもつ厩は西国独特の形態の可能性がある。

遺跡出土資料から見た北海道のマルタニシとオオタニシ

Consideration on two freshwater viviparid snails,
Cipangopaludina chinensis laeta and *C. japonica* in Hokkaido, based on archaeological materials

○松本建速（東海大学）・倉持拓司（葉山しおさい博物館）

Takehaya MATSUMOTO, Takuji KURAMOTCHI

マルタニシ *Cipangopaludina chinensis laeta* は、日本列島の本州島では縄文時代以前の遺跡からの出土例が無く弥生時代以降に急増することから、水田稲作にともなって帰化したと推定されている（黒住2001）。ミトコンドリアDNAによる解析では、中国産とは明確に違うが朝鮮半島産のものと日本列島産のものと分けられない（Hirano et al.2015）。日本列島のマルタニシは弥生時代に朝鮮半島から稲作とともに移入された可能性が高い。北海道でも本州島同様に同種は縄文時代以前の遺跡からの出土は知られていないが現在の水田には生息していることから、近代以降に移住者によって水稻耕作に伴って持ち込まれたと推測し、ゲノム解析によりそれを確かめる研究に着手したことを昨年報告した。ほかに日本列島のタニシ類にはオオタニシ *Cipangopaludina japonica* がおり、こちらは様々な地域の縄文時代早期から晩期の貝塚で見つかっている。しかし北海道では縄文時代の遺跡から同種は出土せず、18～19世紀の貝塚からの出土が知られているだけである。またアイヌ語ではタニシのみに与えられる呼称はなく（知里1976）、アイヌ世界でオオタニシが広く認識されていたかは不明である。本発表では、発掘調査報告書をもとに、北海道でのマルタニシとオオタニシの出土状況を報告し、本州島と異なり、後者が近世以降に見られるようになる意味について考察する。あわせてマルタニシのゲノム解析研究の途中経過も報告する。

女性と出産—産屋の民俗誌事例と考古事例の比較—(続)

Women and childbirth: Comparative study of ethnographical hut used for childbirth and archaeological case, v.2

高橋佳子（豊橋技術科学大学）

Masaya TAKAO

女性が出産・産後に利用していた産屋について、文献に基づき所在地・名称・時期を整理した。その中で産屋について様々な呼び方があり、最近では昭和年間まで存続していた地域があった事が分かった。その結果を元に考古学の発掘調査で検出された遺構の中で寸法や柱間から産屋の可能性のある事例を挙げた（『動物考古学』第33号2016年）。

前回、筆者が調べる事ができていない地域があった。その後も筆者は各地の事例の探索を続けている。今回、愛知県・静岡県の現在、保存されている産屋の写真と共に、その紹介を行う。

そして前回、表で示した産屋の時期の消長について図で視覚的にまとめる。

また、通常的生活の場と異なる空間である産屋を出産に使用していた理由について民俗誌事例を参考に検討を行う。

鯨歯・髭工芸の現状と技術伝承の課題

Current status and issues of the shale bone traditional crafts

内田昌宏（富士山かぐや姫ミュージアム）

Masahiro UCHIDA

先人たちは、鯨歯・髭を生活用品・用具、工芸品、武器などの素材として利用してきた。鯨歯・髭工芸品は、商業捕鯨全盛期の昭和40年代頃には、そのレパートリーが増え、高度経済成長期の観光ブーム期には、国内の鯨にゆかりのある観光地を中心に需要があり、工芸品制作に携わる職人も各地に見られた。だが、その後の商業捕鯨の停止やライフスタイルの変容、観光不況などの時代の推移の中で、鯨歯・髭工芸の認知度が薄れ、需要が停滞するとともに、原材料の確保や職人の高齢化などの課題をかかえている。

鯨歯工芸では、高低差をつけた細かな彫りの技術、鯨髭工芸では、巧みな熱処理技術の伝承が、とくに課題となっている。国内で数少なくなった鯨歯・髭工芸の鮎川、大阪、長崎の事例について紹介する。

家畜イヌとオオカミの臼歯輪郭形状に対する幾何学的形態解析

Geometric morphometrics analysis of tooth outline shapes of domestic dogs and wolves

○山田英佑（山梨県立博物館）・遠藤秀紀（東京大学総合研究博物館）

Eisuke YAMADA, Hideki ENDO

多くの動物種では、家畜化にともない野生原種に比べて顔面が短縮する現象がみられる。この現象は歯が萌出する空間的余裕の減少につながり、特に、出生後に形成される臼歯は、他の歯種に比べて形態形成への影響が大きいと予想される。そこで本研究では、家畜イヌとオオカミの臼歯がもつ形態学的要素を幾何学的手法により抽出し、差異がみとめられるかどうかを評価した。

まず、上顎第一大臼歯を咬合面から撮影し、輪郭上にコンピュータ上で標識点を設定した。次に、各標本で対応する標識点間の幾何学的距離が最小となるような「平均的形状」を算出した。そして、各標本の標識点座標と「平均的形状」との幾何学的距離をあらためて算出し、事前に定義したカテゴリーと、幾何学的距離から推定された「群」が整合的かどうか、主成分分析と繰り返し検定により評価した。その結果、「イヌ」と「オオカミ」というカテゴリー分けをした場合では、70%以上の精度で両者を判別できた。一方、「柴犬」や「甲斐犬」といった、品種レベルでのカテゴリー分けをしてオオカミと比較した場合、それぞれを正しく判別できる確率は40%台にまで低下した。

今回の分析結果は、イヌ科動物において、臼歯形態の変化が、家畜化にともなう体骨格系の形態変化にくらべて保守的であることを示唆している。一方で、家畜品種／野生種とも多様なイヌ科では、比較に用いる試料の選択が結果に与える影響も大きいと考えられる。したがって、仮説の検証には今後、他の歯種も含めたサンプリング数を強化するとともに、頭骨の三次元形態など、ほかの要素を加味した解析が必要である。

普及講演会抄録

6月26日（日） 13:30～15:00

貝塚から探る昔の自然と人々の暮らし

Exploring past nature and human lifeways through research on shell middens

樋泉岳二（早稲田大学）

Takeji TOIZUMI

1. はじめに

豊橋平野や渥美半島周辺は、日本列島でも有数の貝塚密集地域として知られており、なおかつこれまでに多くの貝塚の調査が行われ詳細なデータが蓄積されてきた。ここではこれらの研究成果について、とくに①本地域の縄文後晩期貝塚にみられる生業活動（動物資源利用）の地域性と多様性、および②豊橋平野における中世～近世の貝塚にみられる貝類資源利用の変遷とその背景に焦点を当てて紹介する。

2. 豊橋・渥美半島周辺地域の縄文時代後晩期の狩猟と漁労

本地域では縄文時代後期後半～晩期に貝塚形成が活発化する。これらの貝塚は大きく渥美半島周辺、豊橋平野の牟呂地区、豊川低地～右岸段丘上の3群に分けられる（図1）。各地域での動物遺体（貝類・魚骨・鳥獣骨）の内容を比較すると、牟呂地区の貝塚群と他の貝塚の間で明確な相違がみられる。すなわち、牟呂地区の貝塚群ではハマグリ採集が集中的に行われていた一方で、それ以外の活動痕跡がほとんどみられないことから、これらの貝塚は貝の剥き身処理専用の作業場（「加工場型貝塚」）と推定され、ここで加工処理された貝類は交易品として周辺地域に出荷されていた可能性が高い。これに対し他の貝塚では、様々な漁労・狩猟活動が行われており、土器・石器などの遺物も多く、居住施設や埋葬人骨なども検出されることから、これらの貝塚は居住地での生活に伴って形成されたもの（「居住地型貝塚」）と推定される。これらの貝塚では、湾奥部から湾口部に向けての環境変化に対応する形で水産資源利用の比重増大、活動構成の多様化、活動域の拡大という傾向性が認められる。

3. 豊橋平野における中～近世の貝塚

豊橋平野では弥生時代以降も貝塚の形成が継続し、とくに牟呂地区では中世～近世における貝塚形成が活発である。これらの貝塚は大規模なものが多く、貝類は全体的にハマグリが主体で、骨類の出土がきわめて少ない。これらの特徴は同じ牟呂地区の縄文時代晩期の貝塚と非常によく似ており、時代は大きく異なるが、やはり同様の加工場型貝塚と推定される。いっぽう縄文時代と比較すると近世の貝塚ではアサリの増加がみられる。アサリはハマグリよりも水質の悪化に強いことから、こうした変化は近世における沿岸域の開発に伴って干潟の環境が悪化したことを示唆しているが、いっぽうでこうした変化が近代三河湾漁業の主力のひとつであるアサリ漁業の発展につながっていく点も見逃せない。

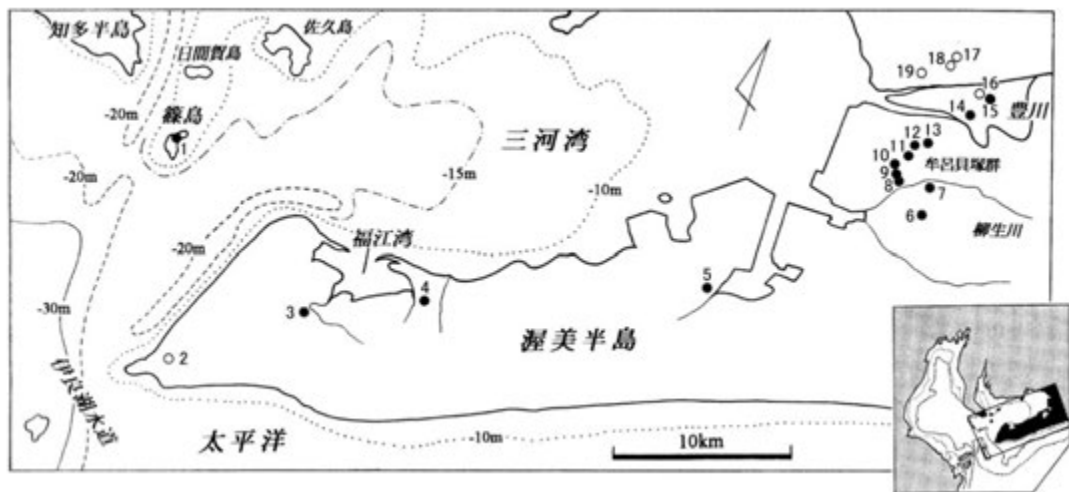


図1 豊橋平野～渥美半島周辺域における主な貝塚の分布。

●：本発表で扱う貝塚，○：その他の貝塚，1 神明社，2 川地，3 保美，4 伊川津，5 吉胡，6 小浜，7 橋良，8 市杵島神社，9 さんまい，10 大西，11 水神（第1・第2），12 内田，13 坂津寺，14 瓜郷，15 大蚊里，16 五貫森，17 檜王，18 菟足神社，19 平井稻荷山。

『動物考古学』原稿募集のお知らせ

『動物考古学』第40号（2023年3月刊行予定）の原稿を募集します。投稿締切は2022年9月末を予定しています。査読結果によっては、次号掲載が間に合わない場合もございますので、早めの投稿をお奨めします。投稿は随時受け付けております。学会誌の充実のため、積極的な投稿をお願いします。

<原稿の種類>

原著論文 : 未発表の新しい資料・知見をまとめたもので結論の明確なもの

研究ノート : 論文に準ずるもので、研究の中間報告や速報性を要するもの

総説 : 特定の主題について研究史・これまでの研究成果・展望などを総覧したもの

調査報告 : 考古学、民俗学、民族学、生物学などの調査の成果報告

資料紹介 : 重要資料の紹介

図譜 : 研究に有用な原図などの紹介

その他 : 書評、関連学会の報告や紹介、国際情勢の動向など

執筆要領と投稿規定は動物考古学会 HP（<http://www.zoarch.net>）に掲載されていますので、ご覧ください。

<投稿先>

〒060-0810 札幌市北区北10条西8丁目 北海道大学総合博物館 江田研究室

TEL : 011-706-4712

E-mail : edamsk (at) museum.hokudai.ac.jp

※ (at) を@に変えてください。

『動物考古学』編集委員会

委員長：江田真毅

委員：小野林太郎・菊地大樹・澤田純明・高橋健・建石徹・津村宏臣・丸山真史



吉胡貝塚埋葬人骨（平成17年度3号人骨）
（縄文時代晩期前半以前、熟年女性、右腕にイタボガキ製貝輪を装着）
画像提供：田原市博物館